

令和元年度 学校評価報告書（総表）

令和 2 年 6 月 1 日

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属駒場中・高等学校	校長名	林 久喜
幼児・児童・生徒数	中学校 367 名 高等学校 485 名	学級数	中学校 9 高等学校 12
2 教育目標等			
① 学校教育目標	「自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす」の理念のもと、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、国際社会で活躍できるトップリーダーの育成をめざす。		
② 学校経営方針	学校教育目標達成のため、本校の伝統的な全人教育を基盤に、第 2 期中期目標・中期計画で本学附属学校が定めた 3 つの拠点（「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」）構想の成果を活かし、第 3 期中期目標・中期計画で掲げている「グローバル人材育成」と「インクルーシブ教育の推進」を積極的に実践する。先導的教育拠点として、SSH 研究開発「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成をめざした探究型学習システムの構築と教材開発」（第 4 期 2 年次）の研究を推進し成果を発信する。教師教育拠点として、本校の教育活動の発信と教員免許状更新講習の充実を図り、中等教育の発展に寄与する。国際教育拠点として、生徒の海外派遣や国内での国際交流を通して、国際社会で活躍できる人材の育成をめざす。		
③ 重点目標	<p>「国の拠点校」「地域のモデル校」として、本学附属学校の 3 拠点構想の成果を活かし、本学との連携の下、以下の 4 プロジェクトを中心に全教職員で取り組んでいく。</p> <p>① 生徒を多角的視野でみるために「生徒の可能性の発掘」プロジェクト 本校の教育実践が生徒の成長過程に及ぼす影響について分析・考察し、その成果や課題について検証する。</p> <p>② 学びとカリキュラムのデザインプロジェクト 授業をはじめとした学習活動とカリキュラムに焦点化して「駒場らしい学び」のあり方を探究する。</p> <p>③ 協働・コラボ推進プロジェクト 地域や他の学校・施設、企業、OB、大学など外部と筑駒生との協働・コラボレーションを生むようなきっかけづくりを行う。</p> <p>④ 教育のグローバル化検討プロジェクト グローバル人材の育成をめざした国際交流の調査と研究、留学、海外進学など国際教育拠点の観点での本学との連携を図る。</p>		

<p>④ 前年度（平成 30 年度）の成果と課題</p>	<p>昨年までの 4 つのプロジェクト①～④を中心に、生徒の人格形成、国の拠点校としての先導的な教育の実践、教育活動の発信と社会貢献、グローバルリーダー育成をめざした教育実践と国際交流などを全校体制で推進してきた。その成果と課題は以下の通りである。</p> <p>【成果】</p> <p>① 通塾と成績等との関係についての調査、多様な支援ニーズへのサポート及び環境整備、メンタルヘルスリテラシー教育、携帯電話・スマートフォン・情報サービス等の利用に関するガイドラインの作成、生活習慣と学校生活との関連についての調査等を実施し、生徒の成長過程において見られる諸問題についての実情把握と分析を通して、支援の可能性を検討した。</p> <p>② ICT 活用および活用環境アンケート、大学入試改革に関連した学校行事の実施時期についての情報収集と研究、互いの授業を研究し合うオープンクラスや校内研修会の実施を通して、学習コミュニティーの形成をめざした。</p> <p>③ 本校関係者による「筑駒アカデミア」、目黒区教育委員会との連携講座、卒業生の講演を実施するとともに、進路懇談会や学年講演会などにおける招聘 OB のデータを収集・整理し、教育成果の発信と社会貢献を図った。「黒姫高原共同生活」等、附属特別支援学校との交流及び共同学習を実施した。</p> <p>④ 生徒の相互交流（台中第一高級中学、釜山国際高校）、海外派遣生徒の受入事業（韓国）、国内での国際交流（本学教員研修留学生との交流、イングリッシュルーム）及び各プログラムの教育的効果分析のための評価枠作成と評価を実施し、グローバルリーダー育成の環境を整えた。</p> <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SSH 研究開発事業の 2 年目の成果の発信と 3 年目の事業を円滑に進める。 ・グローバル人材育成とインクルーシブ教育を推進するシステムの検討を進める。
------------------------------	--

<h3>3 重点目標達成についての総括的評価</h3>	
<p>先導的教育では、SSH 研究開発の推進と生徒研究発表交流会参加の推進や教員対象教育研究会の充実、理科課題研究や学校設定科目である「課題研究」の実践を進めた。今後の課題は、課題研究におけるカリキュラムや評価法の確立、アクティブラーニングの実践の促進、教育活動全般の外部発信の拡充などが挙げられる。</p> <p>教師教育や社会貢献では、教員免許状更新講習への協力と「附属学校実践演習」の実施、第 61 回全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会（国語科・数学科・図書館・生活指導・附属のあり方の各分科会、講演会）の開催、第 46 回教育研究会（国語科・数学科・保健体育科・美術科、講演会）の開催、地域に貢献する「筑駒アカデミア」公開講演会と公開ワークショップ（3 月公開講座は中止）の実践を行った。今後の課題は、「筑駒アカデミア」の財政基盤の確立が挙げられる。</p> <p>国際教育に関しては、筑波大学教員研修留学生等との交流、海外生徒・教員訪問団の積極的受入れを実施するとともに、SSH 事業での台中市立第一高級中学との生徒研究交流（5 月本校・12 月台中）や台湾共同課題研究（立命館高校プログラム）、ISSF2020（タイ国際サイエンスフェア）等への生徒派遣、釜山国際高校との交流（1 月本校・3 月釜山（昨年度は中止））の実施など国際的な研究交流を積極的に行っている。</p> <p>以上の 3 拠点事業を推進する上で、脆弱な財政的基盤と老朽化した施設の改善が不可欠である。</p>	

4 令和2年度の学校課題

国立大学附属学校の新たな活用方策等で示された附属学校の存在意義である「国の拠点校」「地域のモデル校」を踏まえ、先導的教育・教師教育・国際教育の開発と推進、及び長期的視野に立った教育環境の改善を重点目標に定める。SSH 研究開発においては、国際社会に貢献する科学者・技術者の育成をめざした探究型学習の教材開発と実践、主体的な探究活動をするための基礎力育成カリキュラムの開発と実践、探究型学習を実践するためのプログラム開発とサポート体制、探究型学習システムの開発と他校への発信・共有に取り組む。

また、校内プロジェクト①～④（第2年次）について、全教職員で取り組みながら、筑波大学附属学校の第三期中期目標・中期計画で掲げている「インクルーシブ教育」と「グローバル教育」を積極的に推進していく。

① 生徒を多角的視野で見るために「生徒の可能性の発掘」プロジェクト：前年度までで明らかになってきた生徒の実情・実態を踏まえ、より生徒理解の一助となる情報を提供することを目的とする。

② 学びとカリキュラムのデザインプロジェクト：授業をはじめとした学習活動とカリキュラムに焦点化して「駒場らしい学校」のあり方を探究する。

③ 協働・コラボ推進プロジェクト：前プロジェクトの実務を引き継ぎつつ地域や他の学校・施設、企業、OBなどの外部と筑駒生との協働・コラボレーションを生むようなきっかけづくりを目指し、これまでの取組の意義を捉えなおし、新たな取り組みへの深化をはかる。

④ 教育のグローバル化検討プロジェクト：前プロジェクトの調査・研究の流れを引き継ぎながら、本校での教育内容をグローバル化時代にどう対応させていくのかを研究する。

5 学校課題に向けての具体的な取り組み

SSH 研究開発（第4年次）では、探究型学習の深化・充実をはかる。主体的な探究活動をするための基礎力育成カリキュラムの開発と実践においては、数学オリンピックワークショップや理科特別講座の実施、情報科プログラミング学習の教材開発などを行う。探究型学習を実践するためのプログラム開発とサポート体制では、高大連携プログラム、卒業生の活用、社会との連携、国際交流・国際コンクールへ参加支援などに取り組む。さらに、探究型学習システムの開発と他校への発信を行い、外部からの評価を受ける。

次に、校内プロジェクトの取り組みを以下に述べる。（①～④は「4 令和2年度の学校課題」と同じ）

① 通塾と生徒の生活や成績との関係、心のケア・メンタルヘルス（「実践エゴグラムテスト」「感覚力テスト」の検討）、身体的変化の特徴（姿勢写真の経年変化）、情報リテラシーの課題（スマートフォンを利用する授業の調査）などについて研究を進める。また、オリンピック教育を推進する。

② 探究的な学びのマネジメントと評価方法の研究。道徳科の運用改善と教材開発。ICT 環境の改善とその活用。授業実践を通じた教員間の交流・駒場レガシーの発掘。教科・科目連携を促す仕掛けづくり。進路指導・キャリア教育の再考と大学入試への対応。これらの活動を通して、教員の研修・研究と学校文化の継承の場となり、日々の教育活動に対してシンクタンクの機能を果たすことを目指す。

③ 筑駒アカデミア（講演会・ワークショップ・公開講座）の企画・運営、近隣施設との交流。インクルーシブ教育（三浦海岸共同生活、スポーツ交流など）の推進。OB 名鑑を作成。OB と在校生をつなぐ催しの企画・運営などを行う。

④ 海外留学・進学に関する情報とノウハウの集約。本校の国際交流プログラムに関する継続的考察・評価法の研究。国際交流に関する恒常的プログラムの開発（総合学習、課外活動、中学生対象など）と情報発信。他校の国際交流プログラムの調査。教育のグローバル化（大学入試改革）への対応の検討などに取り組む。

6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

・筑波大学附属駒場中・高等学校編（2019）『筑波大学附属駒場論集第59集』筑波大学附属駒場中・高等学校（教員の個人研究成果一覧は、上記論集 p.201～210 に記載）

・筑波大学附属駒場中・高等学校編（2019）『平成29（2017）年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書第三年次』筑波大学附属駒場中・高等学校

・SSH 数学科教員沖縄研修会 資料（2019.8.28、沖縄県立球陽高等学校、本校教員のほか教員など50名参加）

・第61回全国国立大学附属学校連盟高等学校部会教育研究大会 東京大会研究集録（2019.10.18～19、筑波大学附属駒場高等学校、国立大学附属高等学校教員ほか158名参加）

・第46回教育研究会報告書（2019）、筑波大学附属駒場中・高等学校（2019.11.23開催、本校教員のほか中学・高校・大学教員、大学院生など393名参加）

・TSUKUKOMA GUIDE2019-2020 学校案内（2019年度作成）

・「筑駒」創立70周年記念教育支援基金：1億2505万0529円（令和元年末まで）

・生徒の活動（国際科学オリンピックでのメダル獲得など多数、教育審議会等で報告）

学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

令和元年度

学校名

筑波大学附属駒場中・高等学校

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-3	体験的な学習や問題解決的な学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の状況	中1と高1では体験的な学習として、ケルネル田圃での稲作実習を実施した。フィールドワークを中心とした実践的な学習として、中2では「東京地域研究」、中3では「東北地域研究」(3泊4日)、高2では「関西地域研究」(4泊5日)を実施した。高3では年間を通して「総合発表」に取組み、文化祭でその成果を発表した。主体的な探究学習として、中3では「テーマ学習」、高2では「課題研究(ゼミナール形式)」、高3では「課題研究(個別研究)」を実施した。
3-2-1	自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができるような指導の状況	三大大行事(音楽祭・体育祭・文化祭)を中心に、異学年(中1～高3)が委員会を形成し、互いに共生・協働する学校行事を実施した。校外学習(地域研究等)、三大大行事への学級・HR活動、弁論大会等を実施し、リーダーシップとフォロアシップの涵養に努めた。以上を生徒部が中心となって企画・運営するとともに、プロジェクトを立ち上げて成果を検証し、今後の課題を提起した。
6-1-1	特別支援学校や特別支援学級と通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習の状況	インクルーシブ教育の実践として、三浦海岸共同学習への積極的参加を行い、特別支援学校など他附属学校の生徒との交流を図り、相互理解を深めた。また課題研究の一つである「ともに生きる」では、筑波大学附属特別支援学校のほか大学・企業等の協力のもと、さまざまな障がいを持つ方々や教員、関係者との交流や研修を通して、学習を進めた。
7-1-2	校務分掌や主任制等が適切に機能するなど、学校の明確な運営・責任体制の整備の状況	新たな定員(研究員)の確保、教務補佐員の活用、外部業者への委託、卒業生の活用を進めるとともに、各分掌・校内プロジェクト、学級担任が、部長や主任を中心に各部署で責任を明確にした役割分担を行い、持続可能な組織の整備を進めている。
12-1-4	大学、附属学校教育局と連携した多様な学習内容・学習形態などに対応した整備の状況	校内環境改善マップを毎年更新しながら、生徒が安全で健康な学校生活を送るための教育環境の改善に努めた。創立70周年記念教育支援基金をもとに記念会館の建築に向けて設計を進めるとともに、多様な学習形態に対応できる特別活動室の整備を行うなど、教育環境改善に取り組んでいる。
12-1-5	大学、附属学校教育局と連携した学校教育の情報化の状況	専門性を有する司書を継続して雇用し、学術コンテンツ・学習リソースが活用可能な図書メディアセンターを構築した。ICT環境を整備し、教科学習、学級・特別活動、総合的な学習の時間の充実を図った。具体的にはwifi環境の整備やタブレットなどの導入、高校各教室に短焦点プロジェクタの設置を行った。また、学校ホームページの充実とさらなる情報発信に努めた。

14-1-3	先導的教育研究	SSH 研究開発事業では、筑波大学と連携した筑波大学研究室訪問（中3・高2）を継続実施したほか、東京医科歯科大学研究室訪問や様々な特別講演・実習、情報・英語発表や数学オリンピック等のワークショップを企画し実施した。このような学習を踏まえ、高2・3の教育課程に「理科課題研究」および学校設定科目「課題研究」を位置づけ、生徒の自主的探究に発展させた。さらに、探究の成果を、全国のSSH 生徒研究発表会や台中市立第一高級中学で行う生徒研究発表等を通して国内外に積極的に発信した。SSH 中間評価ヒアリングを受けた（文部科学省、2019.10.29）
14-1-4	教員養成・教師教育	教育実習を年2回（3週間ずつ）実施するとともに、実習後に再度教職現場を参観する教育実践演習を合わせて実施した。教員免許状更新講習の選択18時間の会場として企画・運営・講師の担当等を行い、選択講習B・Cや選択講習D「附属学校実践演習」を実施した。また、第46回教育研究会（公開授業・研究協議、講演会）を開催し、教員、大学院生など393名が参加した。
14-1-5	国際交流・国際貢献	科学分野の研究交流として台中市立第一高級中学、文化交流として韓国釜山国際高校との相互交流や研究発表会を実施した（2020年3月の釜山国際高校訪問は中止）。立命館高校など他SSH校が企画した国際共同研究・発表のプログラムにも積極的に参加した。これらの交流プログラムについて、プロジェクトを立ち上げて成果を検証し、今後の課題を提起した。また、筑波大学教員研修留学生との交流を継続した。イングリッシュ・ルームを活用し、外国人研究者や大学院生による「英語で学ぶ・交流する」を通して、実践的な会話能力を育成した。
14-1-6	社会貢献	「筑駒アカデメイア」事業として、本校の人材（生徒・教員・卒業生・保護者）を活用し、地域（世田谷区や目黒区）住民を対象にした公開講演会、公開ワークショップを実施した（2020年3月の公開講座は中止）。教員と生徒が一体となって、地域の小学校や筑波大学と連携協定を結んでいる茨城県大子町の小学校等への出前授業を積極的に実施した。また、近隣の福祉施設とも継続的に交流を続けている。教員による研究授業・実践講習会や生徒の研究発表会を企画し、日頃の教育活動やSSHで得た成果や恩恵を積極的に社会に発信した。